

インタビュー  
コーナー

新しいことを始めるときに  
必要なのは「若者、馬鹿者、  
よそ者」だそうです。



沖縄県立中部病院 院長  
松本 廣嗣 先生

質問 1. この度は、沖縄県立中部病院 院長への就任おめでとうございます。

ご就任に当たってのご感想と、今後の抱負をお聞かせ下さい。

有り難うございます。感想と抱負ですか。10年ぶりに古巣に戻って参りましたが、いわゆる名物先輩方の姿が消え、後輩たちが幹部や中堅として頑張っているのが、かつてのような甘えはもう許されないのだなあという感じですね。スタッフが若返っているのは確かですが、むかし院内に満ち溢れていた野生のパワーは影を潜め、より洗練されたものになっているように感じます。

「新しいワインは新しい革袋へ」ということですかね。新しいことを始めるときに必要なのは「若者、馬鹿者、よそ者」だそうです。中部病院には全て揃っているようです。

やる気のある職員が多く、常に中腰で今にも駆け出しそうな姿勢を感じます。しかしそれぞれが思い思いの方向のベクトルを持っていて、いわばどこに向かうか分からない沢山の活発な偽足を持ったアメーバーのようなイメージです。私の役目はこのエネルギーを一つの方向に向けてやることだろうと思います。そうすれば素晴らしいパワーを発揮することが出来る集団となるでしょう。

質問 2. 県立八重山病院院長として離島医療を経験された先生への期待は大きいと思いますが、今後離島支援の中核的役割を担っている県立中部病院院長として医療確保、救急医療等様々な問題にどのような支援をお考えでしょうか。

中部病院を離れて10年間、県庁を皮切りに

那覇病院、南部医療センター、八重山病院と渡り歩いて分かったことは、離島・へき地の医師確保や救急医療における、研修医の重要性でした。県内で取り組まれている研修制度がいかに重要な意味を持つものか改めて考えさせられました。

離島・へき地病院では琉球大学による支援も大きいのですが、新臨床研修制度が開始されて以降、医局に所属する医師の減少により、離島やへき地への医師派遣では随分ご苦労されていると伺っております。

南部医療センター・こども医療センターでも研修制度が導入されていますが、小児科以外の診療科では後期研修医の数が伸び悩み、未だ屋根瓦の体制がとれず指導医の負担は大きく、その結果として離島・へき地に医師を派遣する能力が十分発揮できておりません。

しかし近年、中部病院にしても、外科・内科はなんとか後期研修医の確保が出来ているものの、小児科・産婦人科はかろうじてギリギリの線を確保する状況で、耳鼻科・眼科・泌尿器科・整形外科・皮膚科に至っては研修希望者がおりません。

このような中で離島・へき地中核病院は、病院事業局の伊江局長初め篠崎企画官や大新垣主任の強力な支援により、なんとか他府県からの医師確保が出来ました。しかし今後もずっと保証されている訳では決してありません。

全ての県民が医療の恩恵に浴するためには、離島・へき地医療の維持はもちろん、救急医療や小児医療、周産期医療などを将来にわたって提供する体制が求められます。こうした仕組みの維持には研修医の存在は欠かせませんし、こう

した医療を通して研修医も医師として成長できるのです。県立病院や琉球大学のみにとどまらず、沖縄の研修病院が全体で離島医療を支援する仕組みを構築していきたいと考えております。

**質問 3. 県立中部病院は臨床研修において国内外からも高い評価を受け、研修希望者が多数おられるようですが、今後の展開や目指すところ等、先生のご意見をお聞かせ下さい。**

我々の研修はあくまでも卒後初期から一般専門医 general subspeciality の研修を行う施設だと思えます。スタッフそれぞれは、専門医として先端的医療を押し進めても、研修医にとってはあくまでも suspeciality の入り口までをしっかりした基本を修得し、標準的診療を学ぶ場です。

最近では急いで専門医になりたがる方が多い様ですが、医師としての最初の5～6年くらいはみっちり基本を学んだ方が、専門分野に進んだ後も応用が利くと思えます。専門医として果たして何年社会に役立つのかを考えると、公務員であれば60～65歳で定年を迎えるのでせいぜい30～35年、肉体的制約を考慮すればもっと短いかもしれないという焦りがあるのかもしれないかもしれません。しかし今のところは医師は死ぬまで医師なので、長い目で自分の専門医としての人生を眺めてみた方がいいのではないのでしょうか。中部病院では外科・内科・小児科・産婦人科を中心に幅広くかつ奥行きのある研修を推進していきたいと考えております。

研修医制度は初期2年、後期2年、フェロシップ2年の形をとるのがよいのではないのでしょうか。研修医は県立病院では嘱託医の身分ですが、この処遇の制約は主治医の立場で業務を遂行しようとする、応召義務や労働基準法上の問題を生じます。出来る限り早急に適切な処遇に変更すべきだと考えますし、病院事業局長の理解を求めながら改善して参りたいと思えます。

**質問 4. 県医師会に対するご要望がございましたらお聞かせください。**

沖縄県内の3つの研修事業をまとめる要の働きは素晴らしいと思えます。さらに後期研修医の確保につながる活動にも強力な支援をいただきたい。

県のクリニカルシミュレーションセンターは沖縄県の研修制度を支援する目的で作られているので、地域医療再生基金が修了する平成26年度以降のセンター運営には、医務課共々直接関わって安定した運営に協力していきたい。

**質問 5. 最後に日頃の健康法、ご趣味、座右の銘等がございましたらお聞かせ下さい。**

たいした健康法をやっている訳でなく、せいぜい犬（黒のラブラドルレトリバー）との散歩程度でしょうか。それも最近は土日に限られています。天気が悪かったり、犬の運動不足のときには犬をウォーカーに乗せて運動させながら、15cm 高の階段の昇降を一緒にやることもありますが、だいたい人間の方が先に音を上げてしまいます。

趣味は、料理と果樹栽培。料理は創造的でもすぐ答えが出るところがいいですね。果樹はいろいろやってみましたが、現在も残存しているのはマンゴー、アテモヤ、アビュー、リュウガン、ジャボチカバ。それぞれにまだ勉強中ですが実りの楽しみがあります。

最近の座右の銘は「万象肯定、万象感謝」です。今年の1月、運転しながらラジオを聞いているときにこの言葉を初めて聞きましたが、本当にいい言葉だなあと感じ入りました。元気の言葉だそうです。

この度はお忙しい中、ご回答頂きまして、誠に有難うございました。

インタビューアー：広報担当理事 金城 正高